

～ 地域医療支援病院としての役割を意識して地域医療の連携を深める ～

さいたま市民医療センターだより

ご挨拶

このたび、山中富美代前看護部長の後任として、4月1日から看護部長に就任いたしました相馬 真貴子と申します。微力ではございますが、当センターの発展のため専心努力いたす所存でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

当センターは2009年3月に開院し、今年で14年目を迎えます。この14年の間には、様々な出来事がありました。



看護部長 相馬 真貴子

東日本大震災を始めとした各地での震災や水害、未だ終息の兆しが見られない新型コロナウイルス感染症への対応。これらの課題にも組織が一丸となり、当センターの役割と機能を維持しながら、地域の中核病院として「市民の健康と生命を守るため」柔軟に対応してまいりました。

看護部では、「目配り・気配り・心配り」をスローガンとして、かけがえのない命としっかりと向き合い、患者さんひとりひとりのニーズに的確に対応し、質の高い看護を提供しています。超高齢社会・近年多発する自然災害や新興感染症などに伴い、更に看護師の役割が期待されています。現在、各分野の認定看護師は10分野10名在籍し、院内のみならず地域でも役割を担い活動しています。また、院内認定制度（造影剤IVナース・抗がん剤IVナース）や特定行為研修を修了した看護師の育成も行い、刻々と変化する社会や医療ニーズに応じて「看護の力」を最大限に発揮できるよう、専門性の高い看護師の育成を積極的に行っています。市民の皆様が、「さいたま市民医療センターに来て良かった」と思って頂けるような環境づくりを目指していきます。

5月、新たに外来部門に血管造影室・化学療法室・救急外来が増改築されました。近年、がん薬物療法は多様化し、当センターでも外来化学療法の件数は増加しています。化学療法室の増床は、がん患者さんの治療ニーズに応じた治療環境の提供やQOLの向上につながるのではないかと考えております。救急外来におきましても、効率の良い換気機能を有した観察室3室・処置室1室が増床され、新興感染症等にも柔軟に対応できる診療体制を整備いたしました。

私事で恐縮ではありますが、私自身がさいたま市で生まれ育ちました。今までお世話になった地域の方々に少しでも恩返しできるよう、看護部長として職務を全うする所存です。前任者同様、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

目次:

相馬看護部長挨拶	1
増改築報告	2-3
宮田医師授賞式	4
私たちのチーム メイト	4

社会医療法人
さいたま市民医療センター

〒331-0054
さいたま市西区島根299-1
TEL 048(626)0011
FAX 048(799)5146
Web: <http://www.scmc.or.jp/>



当センター開院14年目に大幅な増改築を行いました。
そこで今回は増改築のご報告と新しくなったカデ室を紹介いたします。

増改築工事のご報告

『さいたま市民医療センター』は、地域医療機関からの紹介と救急対応を重視した病院として平成21年3月に開院し、翌平成22年8月に地域医療支援病院の名称承認を得て、地域の基幹病院として信頼を得られるよう診療機能の充実に努めてきました。

国においては平成25年に「持続可能な社会保障制度の確立を図るための改革の推進に関する法律」が制定され、翌平成26年6月には「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法令の整備等に関する法律」が公布されたことにより、団塊の世代が後期高齢者となる2025年(令和7年)を目途に、一般

病床及び療養病床の機能分化及び連携の推進にかかる「地域医療構想」が医療計画の一部に制定されることになりました。これらの医療計画や社会情勢の変革を見据え、当センターでは平成30年度から5年間で計画期間とした「第三次中期計画」において、診療機能の強化と狭隘化していたハード面の課題が解決できるよう1階のピロティを中心に増築による機能の拡充とそれに伴う既存箇所の設備改修を検討してきました。

計画の概要として、増築エリアには、将来を見据えて血管造影室を新設したほか、感染症等を考慮した機能性と利便性の向上を図るため救急処置室の拡充、また化学療法室を増築エリアへ移設するとともに、化学療法を安全且つ円滑に実施するため調剤室を隣に併設しました。

さらに改修エリアでは、採尿トイレ内の尿搬送設備の利便性の向上を図るとともに、病院の中心に患者支援センターを設けることで今よりも患者さんやご家族が医療に係る相談をしやすい環境となるよう現在工事を実施しているところで、引き渡しは7月下旬を見込んでいます。

今後は施設設備の老朽化や災害時を想定した既存設備の修繕計画等を推進していくことに加え、変わりゆく医療制度や省エネルギー政策を考慮しながら、安全でより良い医療の提供と働きやすい環境の両立を見据えた病院を目指していきたいと考えています。



増築エリア(1階ピロティ)



血管造影室



救急処置室



化学療法室

文責: 経営企画課課長 津田 秀胤

血管造影室が造設されました



2022年5月の大型連休明けに新たな血管造影室がオープンし、よりスムーズな診療が可能となりました。これまで以上に患者さんを受け入れる体制が整い、迅速かつ質の高い医療を地域の皆様に提供できるよう努力する所存です。

《血管造影室が増設された事のメリット》

①緊急対応がより迅速に！

検査・治療件数(開院から2021年12月まで)	
冠動脈造影検査	6,000件
冠動脈形成術	2,517件
四肢血管に対する治療	423件
ペースメーカー植え込み術	378件

左記の表は、2009年より当センター血管造影室で施行しました検査、治療件数を示したものです。その他にも、脳梗塞に対する血栓回収療法、頸動脈狭窄に対するステント留置術、腸管出血に対する止血術、肝腫瘍に対するカテーテル治療など多岐に渡る治療を血管造影室1台で施行してきました。

そのため、予定症例の検査・治療を施行している最中に緊急症例が搬送された場合は、緊急治療が遅れてしまう事例がわずかながらありました。今回2台体制になった事で、緊急症例への対応がよりスムーズになり、搬送から治療までの時間が短縮される事が期待されます。

②働き方改革にも効果あり

2台体制となってから1カ月しか経過しておりませんが、予定検査・治療の終了時間が早くなり、今のところ勤務時間内で終わる事が出来ています。件数が増える冬の時期にも効果があるのか、楽しみ(?)にしているところです。患者様のご紹介お待ちしております。

《今後の診療について》

血管造影室の増設に伴い、これまで以上にカテーテル検査・治療を成熟させていく必要があると感じています。しかしながら、カテーテル治療の他にも、今後迎えるであろう「心不全パンデミック」への対応、心不全リスク群に対する1次予防、末期心不全に対する地域全体でのケアなど、取り組むべき課題が多くあります。最先端治療はできませんが、今後も地域に貢献できるように地道に診療を継続していきたいと思いますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

③治療成績の更なる向上に期待

当院の直近3年間の治療成績	
冠動脈インターベンション初期成功率	98%
急性心筋梗塞院内死亡率	4.6%

《最後に》

血管造影室の増設の他、普段の診療や生活などを動画としてアップしております。お時間が許すようでしたら、ご笑覧下さい。



血管造影室増設の動画



ハートの会／TOMOチャンネル



新しく増設された心臓血管造影室をバックに

文責:循環器内科科長 中村 智弘

優秀演題賞を受賞しました！

さいたま市民医療センター皮膚科では、毎週木曜日にフットケア外来を行っています。最近では、糖尿病足病変の患者も増え、一般的には切断の適応となる症例でも、どうにか救肢できる症例を経験するようになりました。

そこで今回我々は、第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会(2022年4月23-24日、鹿児島市)において、「病変部の除圧に加え圧分散が有効であった糖尿病性潰瘍」について症例報告(ポスター発表)を行い、優秀演題賞をいただくことができました。表彰は、公益財団法人マルホ・高木皮膚科学振興財団常務理事愛宕栄彦様より、同年5月31日に当院にて記念の盾と副賞が授与されました。

糖尿病患者の足底潰瘍、特に踏み返しのような荷重部では胼胝局面内に潰瘍を形成し、除圧が困難なために治癒が遷延することも少なくありません。本症例では、通勤靴と職場靴の変更とそれらに改良を加えて除圧し、松葉杖を使用して患側の免荷を図りました。また、病変部では局所の圧分散を考慮した結果、約9か月の経過で上皮化に至りました。当外来では、フットケア認定師・看護師、二名の理学療法士、義肢装具士が皮膚科外来で共に診療を行っています。診療のコンセプトは、「なぜその病変ができたか？」を考えることです。五人が同じ空間で診療することは、時間的には非効率的ですが、互いの目線を揃え、それぞれの思いを解り合えることに大きなメリットがあります。本症例が、患者の希望通りに切断を回避できたことは、このユニークなシステムがあったからこそだと思っています。

このような名誉ある賞をいただき、チームの仲間や様々な形で協力していただいている職員の皆様に感謝致します。そして何より、表彰のために遠路はるばる大阪と京都より駆けつけていただきました、同常務理事愛宕栄彦様、事務局緒方裕様、マルホ株式会社京都支店長池田豊隆様、関東支店所長小野健一郎様に深く御礼を申し上げます。これを励みに、これからも皆様のお役に立てる診療をしていきたいと思っております。

文責：皮膚科科長 宮田聡子



前列右より公益財団法人マルホ・高木皮膚科学振興財団緒方様、愛宕様、マルホ株式会社池田様、小野様、2列目左から2人目が筆者



私たちのチームメイト エムサービス株式会社



第2回は『エムサービス株式会社』さんです。入院患者さんの食事や私たち職員の昼食等いつも色々なメニューを考えていただいている、食を提供する会社です。

弊社は、平成21年3月1日のさいたま市民医療センター開院時より、患者様・職員様に安全安心且つ美味しいお食事提供を第一に運営を行って参りました。

私たちは“おもう”心をもって、患者様・職員様と向き合い、求めていることを感じ、それをカタチにして“こたえる”べく、患者様・職員様の満足度向上に努力して参りました。また、従業員への教育・指導を強化努力し、貴センターのご指導とご協力のもとサービス提供を継続することが出来ました。



今後も課題に対して真摯に取り組み、更なる食事サービスの質的向上と業務運営改善を進めて参ります。

貴センター職員の一員であるという認識のもと、食事を通じて更に患者様や市民の納得と信頼を得て、貴センターが益々発展するように、良きパートナーとして、患者様・職員様のご要望に沿った運営を行っていく所存でございます。